

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙 I 8章1-13節>
今の私たちにも関係ある面白い箇所です。

①よく受ける質問 — キリスト者は仏式の葬儀ではどうするのですか？

求道者会などでよく受ける質問です。それは質問者が、「キリスト者は数珠を持ったり、お焼香をあげたりしてはいけないのだろう」と思われているからです。この章で問題になっている、「他の偶像（の神）に供えられた肉を食べてもいいのか」（1, 4, 7, 他）という質問と同じです。では、パウロはどんなことを語っているのでしょうか。②と③にまとめておきます。

②(1-6)ある信仰者たちの答え — 何を食べても構わない。パウロも同感。

ある信者たちは誇らしげに、「自分たちは唯一の真の神様を信じているのだから、何を食べても大丈夫」（4）、と言いました。パウロもその意見に、「存在しない神に捧げられた物を食べても汚れたり、呪われたりしない。主イエスを通して知った世界の万物を造られた真の神様を信じて歩むのだから、もう何も怖れる必要はない」（5-6）、と同意しました。

③(7-13)しかしパウロは続ける — だから食べる、とも言わない。

しかし、パウロは続けます、「今までに身についた考え方からなかなか自由になれず(8)、何を食べても構わないと思える所まで行っていない人もいます。無理に食べさせてもその人を良心の呵責で悩ませてしまう(12, 7)。そんなことになるなら、私は食べない」と。パウロは、「それは兄弟をつまずかせること、キリストに罪を犯すこと」、と重く考えます(12-13)。

④自分の知識（正しさ）を誇るのではなく、人を建てる愛が大事！

以上のことを今の私たちの問題、仏式の葬儀に出ることにあてはめるとどうなるでしょう。次のようになるかと思えます。

1 こうしなければならないという律法はありません。真の神様を思いながら各自の信仰で到達した所で考えて無理せず行えばいいのです。

2 **「知識は人を高ぶらせるが、愛は造り上げる」(1)**。私たちの信仰を他者に尊重してもらいたいなら、その人の信仰も尊重すべきでしょう。自分の正しさを主張するより、他者のことを大事に思う愛が伝わるときに、人は私たちとその信仰を認めてくれるのです。また、私たちの信仰もそのようであるときに、他者のために命を捨てて下さった主イエスに倣う信仰に建て上げられて行くのです。**（「造り上げる」**：パウロが教会を建てることを考えながら用いる建築用語）。ローマ14章13節以下参照。